

# 最明寺殿百人上臈

近松門 左衛門 作

周書に曰く。國を治むるに三常あり。一つには君賢を擧るを以て常とし。二つには官賢に任ずるを以て常とし。士賢を敬ふを以て常とし。合せて三つの鱗形北條五代の鎌倉や。時の時たる時頼のオロシへ執權の代ぞ。私なき。地徳をかくして權貴に誇らず。祝髪して最明寺殿道崇と號し。名越が谷の法華堂に。故右大將頼朝卿の尊影を。木像に刻み奉り大江の僧正廣辨を。別當に請じ。拮念莊嚴禮奠るますが如く。神易と名付け。六十四本の御籤をこめ。凡そ國家の政道に誤ありや無しやとて。我が身を御籤に試みて正し給へる賞罰に。天地自然に偶りのフシ無き代なりけり村時雨。地冬至の日を吉例にて翌年の政所始め。御嫡子女丸時宗十六歳。御舍弟式部の冠者時貞廿三歳。其の

外連署昵近の歴々法華堂に群參あり。錦の戸帳開くれば。各はつと頭を垂れスエテ生けるに。仕ふる如くなり。大江の僧正太祝詞奉り御籤の御箱押載いて。地千早振る正直正路の御籤の文。讀み上げてこそ。フシ講じけれ。それ千里の地を得るは一賢人を得るには如かず。千金を列ぬるは一賢人を求むるには如かずと云々。此の文の心は。たとへば大國を從へ萬寶を求めんと思は。先づ臣下の賢者を求むべしとの御知らせ。目出度き御籤候と考へらるれば最明寺殿聞き給ひ。我も豫て存ずる所臣等が心君の真慮に相かなへり。然らば建曆以來御勸氣謀叛の輩の。上り屋敷の明地多し。當代忠勤の方々へ分ち與へんそれくと中原の大小記執筆にてオクリ仰に。從ひ記しける。先づ

切通しの梶原屋敷は海を見晴らし山にそひ。境内分に過ぎたれども宇都宮の新庄司。朝平に恩賜あるこれはこれ。父朝綱が梶原を射留めたる舊功。且は其の身も學問好み記録を集め文武の嗜。行跡道を守る由外を勵まし徳を勤むる御褒美として。向後若君天女丸殿御師範にこそ。フシさゝれけれ。ハルシ葛西が谷の佐々木屋敷。そも此の佐々木兄弟は功名諸人に獨歩すと雖も。讒者の爲に没收せられし分地なれば。先祖の忠節。御感に堪へず。佐々木十藏廣綱に賜びけるは。故郷に飾る唐錦。絹張山の文覺屋敷。遠藤四郎に賜はる所。甘繩の盛長屋敷は結城の友重。妹背川の蒲殿屋敷は稻毛の彌五郎。雪の下の長明屋敷當代和歌に名を得たる。河内守光行が光源氏の講釋場。今ぞ風雅の道迄も色を上げたる紅が谷。佐野の源左衛門常世が屋敷は花好き者の跡ぞとて。若君の地御花畠。御休息所に賜びてけり。筋違橋の秩父屋敷赤橋左衛門所望の所。比

企が谷の土佐坊屋敷は金田の頼次、松葉が谷の佐竹屋敷は城之介安盛、藤が谷の大伴屋敷豫て足利望みに應ず。天神山の住柄屋敷は仁科の前司。コハリ小林郷の朝比奈屋敷

に叶はぬと覺えたり。地御籤に伺ひ奉れと僧正やがて神呪を稱へ。御箱を振上げ振立て御籤の文を拜受あれば、豆を煮て豆の豆殻を焚く。煙絶えざる事日月の千回と讀みも終らず。あら不思議や此の文は、兄弟の仲不和にして恨ありとの御示し。是に就いて愚僧常々考へ置きしに疑なく。天女丸殿こそは九郎判官義經の再誕候。其のいは

場と踏み荒し。剩へ頼朝公より錦戸に賜はりし。判官誅罰の御判の御教書國中に口ずさみ。御屍を辱しむ早く御使者を遣され。地彼の御判を焼き棄て御墓を清め奪みなば。御勸當のしるしも失せ判官殿の魂魄に。天然自在の御威光今若君の御身に顯れ。智謀計略軍術劍術輕業早業。武勇の達者となり給はん。其の時こそ義經の生れ代りと著く。愚僧が操つたる命靈の易御疑も晴れ申さんと。見通す如く述べらるれば實にく左様の例多し。然らば二階堂入道は奥州に下向し。義經の御墓を祠り同じく誅罰の御教書も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

伊井島の景正屋敷。三浦の光村泰村に賜つたり。袖の浦の靜屋敷月かけの阿佛屋敷。稻村崎の大介屋敷は平の宣時秀時。安藤左衛門光成其の外庶流。二男迄分に應じ功により。住宅の地を地安堵あり實に。廉直の

れは判官殿は丁丑の生れ。本封師の卦に當つて軍術に妙を得。中秋半の誕生敵を制する京官。向齒反つて猿眼鬢の髪の縮みしとや。地若君の本卦支干御誕生の年月刻限。面體骨柄寸分相違なき上に。只今御影の御怒かれこれ以て考ふれば。若君の前生は義經に極つたり。猶其のしるし末々御覽じ合すべしと。地三世命靈理を照らし鏡にかけて説き給へば。思ひ合せて人々は。フシあつと手を打ち給ひけり。僧正重ねて。承れば奥州の田夫者。鎌倉殿の御勸氣よ謀叛人よなんととて。義經の御墓を馬の飼ひ

計略軍術劍術輕業早業。武勇の達者となり給はん。其の時こそ義經の生れ代りと著く。愚僧が操つたる命靈の易御疑も晴れ申さんと。見通す如く述べらるれば實にく左様の例多し。然らば二階堂入道は奥州に下向し。義經の御墓を祠り同じく誅罰の御教書も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

法政やと。フシ各從ひ靡きける。地最明寺殿悦び給ひ如何に天女丸。地來春よりは汝をも政道の連署に加ふべし。地御影に御禮仕れ畏つて引籠ひ。實前に差向へば。ぞつと身の毛も彌立つて。忍辱柔和の佛眼も睨ませ給ふと御影の御顔。二目とも拜まれず頭の上に大磐石の。落ちかゝつたる如くにて

も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

眼も眩み俯伏せにかつばと伏し給ふ。人々惶て抱きのけ看病すれば氣も爽き。顔色もとの如くにてスエチ不思議ノとばかりなり。地最明寺殿驚き給ひ。扱は神君の御内性

も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

と。地最明寺殿驚き給ひ。扱は神君の御内性

も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

も。召返して焼き棄つべしと。フシ仰を受けてぞ退出す。地斯くて最明寺殿御影の前に進み出で。御扱方々に申し渡す仔細あり。近う寄つて聞き候へ。そも我が先祖北條の四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今此の御影の照覽にかけ政道私なしと雖も。遠國波濤の末々民の盛衰。國主の邪正は見るに難く聞く事遠し。唐の大祖皇

帝には。韓王堂に一人御幸の例もあり。頭陀修行の身ともなり諸國の安危を見まほしく思へども。かくと世上に披露せば。諸人僞り阿りて誠の善悪知り難し。されば此の方丈の床をしつらふ事餘の儀にあらず。上官太子の身は夢殿に在りながら。魂は震旦の天台山上に逍遙あり。地我も年月學びたる坐禪三昧の力によつて。此の方丈に閉ぢ籠り觀念を凝らし。身は鎌倉の法華堂。心は秋津洲の浦々里々巡見すべし。其の間は弟の式部の冠者天女丸と心を合せ。貞永の式目を守つて政道怠るべからず。僧正の外此の所案内禁制。坐禪終りて僧正の便次第に迎ひに來れ。追付け目出度く對面せんと禪定の戸を引立て。入るさの月の影暗く、フシ寂寥。として音もなし。地若君を始め諸大名國家の爲とある上は。兎角申し上げ難し。さり乍ら。宮仕へ申す者もなし萬事貴僧を頼み存じ候と。始終の約束こまなくとオクッ

に際し置き給ふ故。旅の物の具取りまかなく何れも歸宅候て。はや夕霧の暗まぎれ御旅立あれかしと。音づれ給へばあら嬉しや數年の望達したり。來年彌生末つ方立歸る迄は我こゝに。在りと沙汰し給へやと内より扉押開く。花の袂を旅衣笠より外は宿なく。苔を敷敷の平包金軸の普門品。紫檀の裁刀矢立の筆百八の菩提珠ならで。御身に添ふる物はなし憲清法師が世を遁れ。修行の肩にかけたるはやさしき島の歌袋。是は浮世の人心ゆがみを矯めて竹の杖。月もろ共に我も亦世上の闇を照さんと。慈悲の眼の衣手や。民の草葉にやつれ給ふ。御有。様ぞ 三重へ有難き。フシ大學の道。地明德を明かに生民を享けし天女丸。御同學には佐々木が嫡子花市。土肥の乙鶴金子の十九皆物讀みの御伽にて。朝は武藝定まつて。晝の時計を宇都の宮のフシ屋敷に通ひ給ひける。地今日のお供は上野の國の住人。佐野の源藤太經景。若君の御出なりと案内す。

朝平立出で學問所へ伴ひ參らすれば。若君を始め何れも行儀繕ひて。面々書物控へらる。朝平若君をつくなくと打守り。扱々御器用千萬。誠の聰明叡智とは若君の御事。それによつて御伽の子供衆迄。我劣らじと覺え強く。小學入より日數もなきに四書古文三體詩。錦繡段此の上に遊ばされんは五經文選。其の外聖賢の經書詩文の書。限りなく候へども。それ迄に及ばず。弓馬の家には孫子吳子三略。六韜司馬法などと申して。合戰勝負の理非を述べたる七書よくよく御得心あり。兼ては史記を御覽あり古人の心を味ふを。弓矢取る身の學問とは申すなれ。大江の僧正廣辨が。三世命鑑を考へ九郎判官義經の。生れ代りと申されしにゆめゆめ疑ひ候はず。地末頼もしき御器量いよく文武の御嗜こそ肝要なれ。詞それに就いて先づ物讀みの始めには。實語教童子教和漢朗詠菅家往來。扱は判官殿の腰越狀お家の式目。是等は諸人存じの書。こゝに未だ流

布せざる秘傳の一卷。是を御傳授致さんと  
策筭の底より取出し。これは君の前生判  
官殿。高節にて御生害の時一期の遺恨を書  
きあらはし。口に含んで失せ給ひし含狀と  
申す物。文法やはらかに候へども無點の物  
に候へば。一遍教へ奉らんと押開けば天  
女丸。扱は我が生れぬ先の筆跡かと。見ぬ  
世の昔なつかしく涙を聲に浮べながら。ヌ  
ナ同音にこそ讀まれけれ。

### 義經 含狀

抑義經末期に謹んで申す。苟も清和の臺を  
出で。多田滿仲の家を嗣ぎしより以來。繼  
父清盛に隔てられ邊土遠國を住家とし。土  
民百姓等に、フシ服仕せらる。然りと雖も。  
當家の御運を開き勅宣の。其の一つに選ば  
れ或時は。野に伏し山に伏し又。或時は漫々  
たる海上に。風波の難を凌ぎ敵徒の首を斬  
つて。鯨鯢の腮に曝し三年三月に攻め辭け。  
大臣殿父子を生捕り京鎌倉を渡し。源氏會  
稽の恥辱を雪ぐと雖も。梶原が讒言によつ

て空しく莫大の。勳功も黙止され親しき兄  
弟を。僅の侍一人に思召し換らる。只これ  
不運と存す將また。前世の業因を感ずるに  
似たり。仰ぎ願はくは梶原父子が首を刎ね  
。義經に手向けられれば今生。後生の恨ある  
可らず。萬端筆紙に盡し難し。恐惶敬つて  
白す文治五年。閏四月廿八日。謹上鎌倉  
の右大將殿源義經。と讀みも終らず若君涙  
に咽び給へば。同學お供の少年迄。フシ皆々  
袖をぞ濡しける。地朝平涙を抑へ誠に義經  
の御形見ばかりにあらす末世の教になるべ  
き物。其の仔細といつば。頼朝程の御大  
將梶原が奸曲に誑され。地實否を糺さず  
御舍弟を滅し給ふ事。火の中にある寶にめ  
でて片手を焼くに異らず。されば大將とし  
ては先づよく人を知るべき教ならずや。又  
梶原は君の寵に誇つて己れを忘れ。一旦の  
利に眼眩み人を害すと思へども。却つて我  
が身を害すること。天に向つて唾すと四十

二章經には説かれたり。地撮こそ頼朝公御  
逝去の後。安達の景盛を頼家公へ讒言し。  
結城の朝光を尼將軍へ讒訴申しける程に。  
頼朝御存命の間こそ諸人敬ひ畏れけれ。  
年來疎む梶原父子何に心を置くべきと。和  
田小山畠山三浦の義村千葉之介。八田小笠  
原藤九郎。盛長以下の御家人六十六人。鶴  
が岡に會合し景時が罪五十餘ヶ條。連判の  
訴狀を認め因幡守廣元を以て。頼家公へ奉  
り既に誅せらるべきに極つしかば。猛威  
を振ふ梶原が日頃の辯舌辯口も。矢弭の紋  
の矢も楯も大勢に堪らばこそ。星月夜の編  
笠や鎌倉山を夜抜けにして。相模の國一の  
宮へフシはふく逃けて隠れしが。地逸りに  
逸る我武者ども餘さじ物と在々所々。手ひ  
どく殿しく追搜され鶴川の小鮎鷹に雉子。  
猫に追はれし野良鼠あなあさましや梶原父  
子。郎等下人も散散に馬に乗つても舍人な  
く。鞍は置けども鎧はさす都の方へと志  
し。駿河の國を駆け通る代代我等が本國な  
り。父彌三郎朝綱一族集め小的射て。勝負

二章經には説かれたり。地撮こそ頼朝公御  
逝去の後。安達の景盛を頼家公へ讒言し。  
結城の朝光を尼將軍へ讒訴申しける程に。  
頼朝御存命の間こそ諸人敬ひ畏れけれ。  
年來疎む梶原父子何に心を置くべきと。和  
田小山畠山三浦の義村千葉之介。八田小笠  
原藤九郎。盛長以下の御家人六十六人。鶴  
が岡に會合し景時が罪五十餘ヶ條。連判の  
訴狀を認め因幡守廣元を以て。頼家公へ奉  
り既に誅せらるべきに極つしかば。猛威  
を振ふ梶原が日頃の辯舌辯口も。矢弭の紋  
の矢も楯も大勢に堪らばこそ。星月夜の編  
笠や鎌倉山を夜抜けにして。相模の國一の  
宮へフシはふく逃けて隠れしが。地逸りに  
逸る我武者ども餘さじ物と在々所々。手ひ  
どく殿しく追搜され鶴川の小鮎鷹に雉子。  
猫に追はれし野良鼠あなあさましや梶原父  
子。郎等下人も散散に馬に乗つても舍人な  
く。鞍は置けども鎧はさす都の方へと志  
し。駿河の國を駆け通る代代我等が本國な  
り。父彌三郎朝綱一族集め小的射て。勝負

を樂しむ射塚の前御免も乞はず乗打す。朝綱弓と矢取つて番ひ大音揚げて梶原殿と見かけたなり。御徒歩立にて通るにも的場には故實の候、禮儀もなしに乗打は。斯くいふを宇都宮と知らずになせる慮外か。よし知らば知るにもせよ。朋輩の情に人と人は許しもあり。弓矢に向つて乗打は正八幡の神罰の矢。地受けて見よと白木の弓。大中黒の的矢平題箭かけて引きしほり。かけ行く駒に拳をつけ弦音高く切つて放せば。過たさ跡に乗つたる嫡子源太景季が。押付を胸板へぐつと射抜いて餘る矢が。親平三景時が耳の根を肩先迄。咽笛かけて射通され親子一所に馬上より。左手右手へをちこちの。人の鬱憤世の遺恨。此の時にこそ晴れてけれ。地父朝綱が其の時の御恩賞の餘慶によつて。此の梶原の屋敷を今度某拜領し。土砂改め候へどもあれに候紅梅の早咲こそ。景時が二度の断けの筈の梅の名残として。植置きたると承る。末の世のしるし

に引残し候が。地折々雨の夕暮などは梶原が一念の火。梅の梢に來る由下女下郎などが申し觸らし候へども。某は遂に見ずいかで左様の事あらんと。語り給へば人々も多あつと感じておはします。地佐野の源藤太經景次の間より罷り出で。御好き時分御供致し若君のお蔭によつて。御講釋承り我等の仕合一代の徳。扱々梶原めは武士たる者の風上にも思みたる者。地其の時節經景生れ合せ在るならば。讒言吐き出す舌引抜き。四十一年過う生れたなあ。あの紅梅が梶原梅か何の彼奴が簾の梅。一度の断けも半分嘘か何の彼奴が簾の色。憎くい梶原めがしや面輕薄らしい花の色。憎くい梶原めがしや面踏んでくれんすと。廣庭に飛んで下り股立つかんで古木の梅の。枝も折れよ根も碎けよ。どう。どう。どう。どう。どう。踏み付け。拳を上げて撲つや觀のほつきと折れて。落花頗る狼藉たるヲ、さもさうず景時と。雜言

笑にぞなりにける。地時しも冴え行く時雨の雲雪を催す空凜じく。山風落葉を吹立てく。吹上ぐれば。紅葉天に翻翻して。火燄の渦巻く如くなるに。梶原が獨體虚空にひらめき舞ひ下り舞ひ上り。源藤太が誓にいつかこそは囃付きけれ。されども人目に見えざれば。其の身はさしも猶知らず心も元の心ながら。氣は逆上し酩酊と酒に酔へるが如くなり。地斯かる所に安藤左衛門光成方より。地急々の御注進使者を走らせ候と。大息ついで伺候する若君驚き。其の使者これへ急々の注進とは。何事やらんと宜へばさん候。御叔父式部の冠者時貞殿。御家の重寶三つ鱗の御旗を奪ひ取り。本國伊豆の三崎へ押渡り給ひ候。勢ひ全く逆心の御企と見え候。大殿坐禪に御籠りの中と申し。延引にては御太事たるべし。屹度御征伐然るべしとの注進なりとぞ申しける。地天女丸横手を打つてこは如何に。その旗といつば先祖時政に。江の島の辨財

天直に與へ賜つたる。三枚の鱗を旗の紋と勸請し。守とも寶とも是で立つたる北條家。叔父は一家といひながら庶子へ渡さんやうはなし。しや何事かあらん伊豆の三崎は扱置きぬ。鬼界高麗契丹國雲の果海の果。

陸ならば駒の蹄の立つ限り。海ならば櫓權の立た、んす所迄。攻寄せ攻寄せ取返さで置くべきか。天女丸時宗が鑑初の初陣に。

叔父の首提けずんば鎌倉へは歸るまじ。山路を廻つて人馬の足を疲らすな。由井の濱より兵船出し。只一時に揉み潰せ。馬に鞍置き物具せよと勇み進みし御有様。けに義經の再誕と、フシ札を打たざるばかりなり。

堀原が死靈に犯されし源藤太進み出で。

此の度の先陣は此の経景が賜つて。眞先かけうするにて候。仰付けられ候へとこそ望みけれ。若君聞きも敢へすいやサ。先陣も後陣もこの時宗がなくばこそ。先陣は某よ。地いやく殿は大將軍。是非先陣は經景に賜れかしと言葉を返せば。いやとよ

大將軍とは父最明寺殿ならで外になし。我も汝等同然よ功名は仕勝ちぞよ。親にも子にも遠慮なし急げやく速ければ。待つ事あつて靜なり遅くて走る道は物うしと。名將の詠みししぞかしと口ずさみ出で給へ言いうて見よと太刀に手をかけ給ひける。然の惡口。我に向つて推參千萬。サア今一

源藤太御袖をひかへ。御然らば今度御船には阿蘭陀櫓を立て申すべし。ム、ウ御身も我も同然鮫鯨とも河豚黨とも。言うて見せんと罵りあふヲ。鮫鯨武者の切光受

して阿蘭陀櫓とは何ぞ。さん候馬は乗手の不覺の負を取るもの候。艦舳に櫓を立て違らりと抜き真中におつ取りこめ。我討取ら

と今はせも敢ず。エ、門出悪しし、退かじと思ふさへ退くは軍の習し。一足も退かじと思ふさへ退くは軍の習

ひなり。末社殿と笑ひ給へば同學の。十四十五の輩成の使者経景の小腕取つて引出す。逆櫓の遺恨止つて今魂に入り代り。身は空船の命。堀原が心となるこそ。三重へあさましき。寶治二年十一月癸まじりの玉霞。雪の下の廣小路一ぱいに降る黒羽織。奴が髭に氷

柱にて奥齒にかじる唐辛。赤熊の馬標御馬

北風に嘶かせ。打つて出でたる大名こそ最

明寺殿の御舍弟。式部の冠者時貞公と勢猛

なる供先を。いかつらしき頬被若黨二三輩

引具し。押割つて通らんとする徒士の者ど

も引つ捕へ。詞こりや盲目め冠者殿を見知

らぬかと。頬被ひつたくれれば佐野の源藤太

經景なり。馬上より聲をかけヤア經景か。

時貞直に尋ぬべし。つつと是へと呼び付け

はつたと睨み。御分は身代不相應に。輕々

しく忍ぶ體は訝し。兄最明寺坐禪に籠り在

する内は。此の冠者が執權なるに。供先割

るは緩怠者。申し分によつて急度過怠にい

ひつけんと。返答悪しくば鎧の鼻にてフシ

蹴殺し退げんす面色なり。地經景地に跪き

御咎め至極仕る。詞さりながら聊か慮外に

候はず。直に注進申し上ぐる義候故。人目

を忍ぶ右の仕合眞平御免蒙るべし。扨御注

進の趣は。先づ某が兄佐野の兵衛政常。

先年人知れず闇討に討たれ。其の子源左衛

門常世は阿呆拂ひに仰付けられ。兄政常が

遺蹟佐野の庄此の經景に賜つて。奉公の忠

を勵み候。然るに紅が谷常世が邸某望み申

せども。御用の場所とて吝惜あり。此の度

故もなき者にさへ。いやが上に屋敷地を賜

はり。多年懇望の我等には換地の御沙汰に

も及ばず。常世が屋敷を若君のお花園にな

し拙者は鼻をあくばかり。國を保つ者は。

一步の地も功ある武士に與へ弓馬の用に立

てこそ。なんぞや若君のまだ乳のまう飯食

はうを。義經の再誕と鳩のかひの僧正に誑

され。鎌倉の御家督とて大分の地を花園に

費し。若しもの時に草木の花が槍一本の役

には立たず。當家に於て天下の執權には。

誰あらう冠者公と諸人舉つて申す所。殿の

嗣がせ給はんに誰がぐつとも申すべき。さ

ればこそ天女丸。殿をけぶたく思はれ。最

明寺殿坐禪の内に攻滅さん催にて。則ら物

讀の師匠宇都宮朝平。安藤左衛門光成以下

を語りひ合戦の用事急に候。かた／＼御油

斷あるべからずと眞逆様にぞ讒しける。冠

者は彼に物が憑いて言はずとは夢にも知ら

ず馬より飛んで下り。ナ、神妙の注進大慶

々々。傍からさへ齒がゆきに我に油斷ある

ものか。空からぬ證據を見せ申さんと首にか

けたる錦の袋を取出し。是ぞ辨財天先祖に

授け給はりし。三つ鱗の家の旗先づ此の主

になるからは北條家の大將なり。御分は

急ぎ此の旗を伊豆の三崎へ守り奉り。宇賀

の社に籠め置き淡の船場に關を据ゑ。渡海

の船を止むべし追付け跡より加番として。

佐々木の十藏廣綱を遣さん。我鎌倉を持

ち堅め安藤宇都宮に閉門させ。天女丸を押

籠め置かん兄きの坊主が咎めなば。靜謐の

世を騒がする謀叛人と訴ふべし。我が願叶

ひなば屋敷などは軽い事。一箇國は極つて

其の外兼國望み次第。地辨財天も照覽あれ

フシ虚言なしと語りける。地經景思ふ圖に

讒言しこれ殿。とてももの事に。其の兄きの坊

様ぐるめにしてやらうとは思さぬか。ヤレ

それを高うは言はぬ事心にばかり持つて居よ。向後御邊は一方の大將と頼むからは。威勢をつくる褒美として一家となつて北條の。家の定紋譲るぞと鯖をつけたる鱈形。

北條殿や庖丁殿にかゝらん末こそ三重へ危ふけれ、フシさる程に。地式部の冠者時貞は

天女丸時宗を、無體に抑へ謀叛人と號し松が岡の彌勒堂に取つて押籠め重代の赤旗を

伊豆の三崎に隠し置き。山手には二重三重の柵をふり。海手に數箇所の物見の番。龍

禪が崎の船場には佐野の源藤太經景。佐々木の十藏廣綱役所を構へ。干潟遠く逆茂木

引き渡海の船さへ停止あれば。漁村の賤も輕釣り鯛釣り兼ねて網の手を。餘所にみる

めをかづきする海人もさかてを打休み。波の遊魚も飛鳥もオクリ通ふ方なき要害なり。

フシ折しも夜更け。波靜かに番所の薄湯り行けば。天女丸はやうく、にフシ圍を免れ忍

び出で。字都宮只一人語りひ湊に紛れ着き給ひ。サア時分はよきぞ朝平。兩番所も

靜まつて海上は退潮なり。地命限りに渡り越し向へさへ着きたらば。番の奴ばら切散

らし旗を奪ひ還すべし。よし仕損じて死するとも取返さでは生がひなし。死ぬるに極

めていざ来いと。飛び入らんとし給ふを字都宮抱き止め。如何に退潮なればとて思

召しても御覽ぜよ。三里に餘りし海の面。徒歩渡りの人間業に叶ふべきやう候はず。

地潮に溺れし御死骸を雜人はらに引き搜され。恥辱といひ譏者に利潤つくといひ。か

たぐ粗忽の御振舞御思案の入る所と。制すれば齒嚙をなし。エ、口惜しし是しきの

事を治め兼ね。父最明寺殿へ言上し坐禪の妨け御大願を破らんは。地後代迄の誹の種

親に離れし我ならば。冥途へ問ひにやらる、かと嘲は歴然たり。エ、翼もがな鯖もがな

と平沙に兩足踏み込んで。拳を握りはらはらとフシ無念。涙はせきあへず。ハルシ友

感はせる小夜千鳥。驚く方の人足や年の頃配十八九。初夜の月さへはや西東オクリさま

よふ。ふりにて地人々をちらと見付け足早に逃げんとす。字都宮走り寄りむすど捉へ

こりや女め。地必定此の番所へ呼ばれし傾城ぢやな。我々こゝに在る體を番の者に知

らするふりと見えた。是から直に己れが宿へ歸ればよし。番所などへ入るならば海へ

切つてつばめん。サアどうぢやと嚇しける。ア、つがもない。何のそんな妾等である。此の浦のかづきの海人。此の頃御法度

きびしう若布一本海松一株。取る事ならねば朝夕の迷惑さ。夜は番衆の隙間もとそつ

と見に来たばつかり。地ほんに男に手を取りられた一期の始にあた厠慾な。跡がひりひ

りひり／＼する。あの若衆様やつわりと締直して貰ひ度いと。浦の海人さへ當代はフシ

只は通さぬならはしなり。地朝平是は屈竟彼奴を賺して。海の淺瀬を問はんと思ひ。地

ラ、許せ／＼知らなんだ。そちに問ひ度い事がある。返禮には錢遣らう隙はとるまい。

地サアあの濱へ一寸来いと手を取ればエイ。



鏡取つて濱へ行くやうな者ぢや地ござんせんとてひんとする。爾若君見兼ねてこれこれ海人人。吾々は念願あつて向ふの三崎へ忍ぶ者。此の本望達すれば海人のかつきも漁船も前の通りに自由なり。此の灘を越すやうあらばどうぞ指南はなるまいか。地わりのない事よと宜へば推量やしたりけん。何が扱お尋ねといひ世上のため包まんやうはなけれども。昔よりこの入海徒歩渡りは沙汰にも聞かす。さりながら如何なる千尋の大海にも。潮頭潮別れ上り潮落潮。片潮兩潮雄潮投潮湧潮などと申し。潮合を見てかづきの海人の龍宮城へも入るなれば。叶はぬ事とも申し難しあれく月影の。二つに割れて一筋に尾花の靡く如くなる。波の別れの末こそは海人の通ひの潮路なれと。指さしてぞ教へける。地若君も朝平も今は案内ござんなれと。裾かゝけてさんぶくと入り給ふ。なうくたとへ潮路覚えても海人ならぬ身であぶない事。怪我遊ばすなら先づ跡へと言へども耳に聞き入れず。三段許りは足も立つ。次第くは波は高し底深し。流石の朝平力なく。先づく跡へと御手を取りオクリ元の磯邊に打上り。地お腰の物に水入らぬか。やれ先づお足を拭うて進せてくれ。頼むくと捲り手にフシ袴を絞るばかりなり。爾それく人の言ふ事聞分なう情の剛いはお身の損。地若衆様のお足拭ふにも手拭はなし私が。鹽焼衣お慮外と上がひ下がひ揉みくさにして。足の甲か足首迄ム、く柔かなお肌やな。こはお膝こは太股内股の。此のもよならわしや小町。お前は四位の少將でフシ車の欄にと抱き付く。地若君飛び退き慮外者めと。柄に手をかけ給ひしを朝平暫しと止め參らせ。これ女彼方は鎌倉殿の若君。今度の騒かくれなければ知つたらん。汝が力に海を越え御旗を奪ひ參らせなば。財寶の願ひはいふに及ばず。たとへ一夜のお情でも相違あらじと申さる。地海人嬉しけに打笑みて。

さこそは見付け參らせたり誠に賤しき海人の子の。御情とは憚あり鱗形の御紋付の。お肌着一重下されば世の思ひ出に肌につけ。千萬里の荒海なりとも波を潜り水を分くるも海人の業。奪ひ還して奉らんと申せば若君宇都宮。それ易い事是なりともと平紋の唐衣に。唐縫したる柳裏ひらりと脱いで賜ひければ。海人は戴き打被き岩頭に駆け上り。地自らは小袋坂金龍水の池のほとりに。年経て棲むものなるが江の島の叔母君より。賜つたる肌の産着を惡人に奪はれ。五體の力盡き果てしに今北條家の生き鱗。九萬九千の飾となつて神變。神通自在を得刹那が間に彼の旗を。奪ひ取つて參らせんと逆捲く。波に飛び入つて。分け行く潮八重百重百の媚ある顔容に。尾は二十尋の金の鱗月に映じて泳ぎ行く。辨財天の眷屬の旗を守りの神體と思ひ。白波地走りしは帆かけし船の三重く如くなり。地波の音に目を覺し番所騒けば惡かりなると。朝平若君身を潜めフシ

磯山蔭に忍ばるる。地源藤太經景木戸を開かせつと出で。風も無きに波の音千鳥鷗の亂るゝは。天女丸が方より水練の忍びを入れたるに疑なし。地すはく沖に物こそ見ゆれ仙術魔法の者なりとも。我が馬上に及ばんやと元より武勇第一の。梶原が精鑑入替りたる其の驗。弓箭の本意此の時とフシやがて物の具堅めける。地爰に佐々木廣綱は相番ながら若君に。豫て心を寄せし故聞かぬ顔にて控へしが。經景が打つ立つ由共に防ぐ風情にて。しやつ妨げんと馬鎧花やかにこそ出立つたれ。經景其の夜の裝束は木蘭地の直垂白銀の摺付小札。白絲にて菱綴したる斑織の鎧を着黒保呂の矢の廿四指いたる簾かき負ひ。本滋藤の弓持つて。雨衣といつし宿月毛の聞うる名馬に乗つたりけり。下コハリ佐々木が出立つ物の具は紅裾濃に所々。四つ目結。摺つたる直垂卵の花を黄にかへして。袖標付けたる鎧筋切文に塗籠の矢。吹寄せ藤の弓持つて。長月と

いふ地黒。栗毛の馬にぞフシ乗つたりける。地二人互に劣らじと引つかけく打つたりしが。經景は佐々木に一段許進んで海へさつとぞ打入つたる。廣綱先を越されじと聲をかけて經景殿。冬海は潮早し腹帯がのびて見えさふぞ。深みになつて鞍かやさん締め給はぬかと呼ばはれば。經景さもと思ひけん手綱を鞍のゆがみに捨て。地左右の鎧を踏みすかし弓弦を唾へ。腹帯を解いて引締め。く縮むる間に廣綱すつと乗抜けて。佐々木が家の骨法御免あれといふ儘に。ざんぶと打入り半町ばかり先に進んで泳がせける。無嫉たい佐々木殿功名せうとて不覺ばしし給ふな。此の頃海人のかづきも絶え海松茂つて見え候。馬の足纏はせて。過あらん笑止さよ。心得られよと誑ればヲ、親にて候高綱が。傳へし習ひあんなると。地太刀を抜いて水底を切拂ひく三頭にどうと乗り下り。手綱くり上げ聲をかけ馬に力を添へたりけり。地冬も半の浦

吹く風磯打つ波を卷上げて水や空空かき曇り。天も凍りて霧散り。コハリ雲の足さへ早潮に。底の岩角巍々として海上遙に慨々たり。是は一騎當千の高綱が嫡々なり。彼は文武二道の武者梶原が魂魄なり。いづれに勝劣あらばこそ廣綱進めば經景つゞき。經景進めば廣綱續き響をひつ揃へ。押並べて渡すとすれば切付太腹どうくく。波鞍壺に打越して笈撓がたに突流され。半月に乗る所もあり馬の草分鞆つくし。さらさらくくさつと乗分け乗割つて。一文字に行く所もあり高き波には一鞭くれて。ふい／＼聲に躍り越え低き波にはしつとと當てて。手綱をくつて乗下ろし渦巻く波の右巴。左巴にくるくくくるりくくの輪乘りに潮を巻き解し。巻き戻し地巻き崩しハツミ踏に。蹴立つる潮煙。隔ての霧と立塞がつて山さへ見えぬ海の面。星を自當の兩鎧息もつがせず踏みもためず。負けじ劣らじ我先にとオクリをめきへ叫んでフシ渡したり。

地經景馬や劣りげん馬上にや疎かりけん。

三段ばかり乗後れ淺みに駒をかけ寄せて。

漂ふ浮木に手をかけて一息ほつと吐いたれば。

佐々木は沖の流れ洲に駒を控へて鞍か

さに突つ立ち上り。詞惡う候經景殿叔父盛

綱が藤戸の一流、海をばかうぞ渡すものお

先へ參る御免あれと。地手綱かいくり乗出

す陸には兩家の郎黨組子。波打際に下り渡

り。固唾を呑んで控へしは、フシ前代未聞と

いつつべし。地かゝる所に式部の冠者時貞。

百騎ばかり引牽し喚いて來り。調やあく

兩人天女丸こそ宇都宮を語らひ何處ともな

く落失せたり。方々が勢は如何なる故ぞと

呼ばはつたり。經景馬上ながら。扱は只今

此の海を泳ぎ越す者候故。兩人かくの如く

追つかけ候。疑ひもなく天女丸ほつつめ提

け參らんと。駒の頭を立直せばやれ待て待

て年にも足らぬ小丁稚。彼奴等が分にて泳

ぎ越す事思ひも寄らず。それは必定水練を

入れて。其の身は此の磯山に隠れ居るに極

つたり。我々山を狩出し濱端へ追出さん。

兩人海に下立つて射取れや射取れと下知す

れば。地承ると經景弓と矢取つて打番ふ。佐

々木もあつと答へながら過つふりにて冠者

めが。真中を一筋と思ひ込うでぞ控へける。

時を移すな狩出せと。打物拔連れ松明振り

谷よ峯よと三重へかり立つる。フシ朝平今は。

地是迄なり濱の手へ落ち給へと。暫し支ゆ

る其の際に若君磯邊に走りつき。後を見れ

ば時貞片手矢はけて追つかくる。今は詮方

あら磯に沈まば沈めとざんぶと入り。渡る

ともなく行くともなく陸地に立てる如く

にて。地四五町沖に浮み出で足下を見れば

不思議やな。海人に與へし上の衣波の上に

漂漾して。若君を救ひ立てたるは、フシさな

がら筏の如くなり。地沖には經景鐵を磨き

寄せば射留めん其の勢。陸には人数銃を

揃へ返さば討たんと。ゆめきしは。火坑に

落ちし罪人の取り付く藁を黑白の。鼠きし

つて惡龍舌を振るといふ。苦海の譬に異ら

す。フシ遁れつべうはなりけり。然つし所に

二階堂入道。旅裝束にて息をばかりに斷付

け。暫くく事の仔細は存せねども御使

私の儀にあらず干戈を止め聞き給へ。今度

某大殿の仰を蒙り。奥州高館に下り判官殿

の御墓を祭り清め。同じく頼朝より御勘當

の御教書を取り歸り。仰に任せ只今焼き棄

て申すからは。御勘當の罪消えて義經の靈

魂妄執晴れ。若君の御身の上武運の御祈禱

たるべしと。地御教書の封を切り下人に持

たせし清火を取つて。打ちかくれば燄は炎

々と。天に通じて名將の俊逸精智悦び給ふ

其のしるし。白銀の翼ある白鳩虚空に舞ひ

どり。天女丸の懐にオクリ納まりへ入るぞ不

思議なる。地判官の虚名晴れければ讒者の

勢力も弱り。梶原が亡魂フシ冥々として失

せてけり。地經景心茫然と夢か現か空蟬の。

もぬけの殻の如くにて手綱取る手も覺えな

く。平頭を抱き付き馬も足も立て兼ねて。

波に漂ひ浮きぬ沈みぬ泡沫の安房の浦路に

流れ行く。冠者苛つてヤア物々し。鬨たとへ生れぬ前生は判官にもせよ辨慶にもせよ。現在にては我が甥なり叔父に向つて逆心構へ。國を損ひ家を破る悪黨征伐なんの憚りあらん。舟を浮べ熊手にかけ搦め取れと駆廻り。地どつと蘆邊に下り浸たる兵術無雙の義經の。靈氣を感じし天女丸忽ち自然の妙を得て。波も潮も事ともせず巖の險岨にひらりと飛び、磯の松が枝躍り越え大勢に駆け向ひ。天狗に授かる飛行の術鬼一が傳へし一卷の。太刀風騒ぐ虎の巻獅子奮迅虎亂入。前を拂へば後にあり地を殖ぐれば霞に入り。陽炎稻妻水の月宛然飛鳥の三重へ如くなり。フシさしもの大勢一人に斬り立てられ冠者も數箇所の痛手を負ひ。命ばかりを遁れんと水練は心得たり。海へどうと飛び入つて。伊豆の三崎を志し。フシ拔手を切つて泳ぎける。地沖の浮洲に控へたる。佐々木の廣綱。向ふさまに駒を乗り入れ。圓天道を守る廣綱は天女丸の味方ぞや。尋常に

最明寺殿道行 (下之卷)

腹を切り給へさなくば佐々木が矢先にかけて。後世甲はんと言ひければ冠者大音上げて泣き出し。それは餘り惨い仕様。如何に水を得たればとて三里五里は泳がれず。今助けてたも。佐々木殿廣綱殿と立泳して拜みける。地佐々木返答にも及ばず中指取つてからりと番ひ。ひやうど切つて放つ矢に肝の束を射通され。眞逆様に跳返し底の水屑と沈むを見て。残る軍兵うら崩れしてフシ皆散々に逃げ散りける。地時に海上連立つて月清々たる波間より。紫金色の耳ある蛇潮を巻き來る其の音は。和琴の調の如くに。磯邊の松に攀上りく。梢を唾へ尾を垂れて。鱗の衣を地はらくくくと。三重拂ひ残すや。三枚は家の紋付旗の手の。悠々とか、らせ給ひけり若君三拜恭敬して。戴き納め歸るさの。道の用心佐々木は馬上に先を打てば。跡を抑へて宇都宮君判官の再誕なれば。二階堂は辨慶と敵の捨てたる槍長刀。突棒刺股熊手おつとり打擔け。夜はしらくくと七つ道具明け六つ。五つ五代の北條家。四つ世の中三つ鱗尾鱒を。つけてぞ語りける。

一所不住の沙門にて候。我此の程は信濃の國に候ひしが。餘りに雪深くなり候程に。先づ此の度は鎌倉に上り。坐禪に籠り春になり修行に出でばやと思ひ候。地蝶の翅の白粉を草にこぼして梢には。鶴の霜毛をぬぎかくる。フシ雪は花より花多き。木曾の御坂の。谷風は。吹けども袖に。フシ寒からで。名も嫉ましき風越の。峯の吹雪ぞ身には沁む。スエテ身は墨染の墨衣。さながら雪の一筆鴉。尾羽うちかれし修行の旅。佛恩報謝の爲にもあらず。自證菩提の道にもあらず。フシ浮世の。民におほふかな。覆へど漏るゝ竹の笠。似合はぬ身にも引締め

てしやんと召したる御有様。有難しともフシ  
たのみあり。地幾重越しても信濃路は。ま  
だ谷峯の大井山人里遠く離れ坂。スエテ筑摩  
の川の渡呼ぶフシ聲も。嵐に埋れて。笠で  
招けば笠の端にホオクリ糞。たばしる氷柱か  
らく。フシ輕井澤。見上ぐれば。朝ほら  
け。淺間の嶽に立つ煙。その一筋を様々に。  
霞に詠じ雲に見て。歌人は思ひを述ぶると  
かや。我は煙の立居にも。民の竈の賑を  
天に祈りの千早振る。雪を袂に幣とれば。  
雪は五穀の精たりと。フシ唐人も。豊年を  
祝ふ兆のあれく。地下も在所も。にぎ  
く。ふくく。福島の。賤の妹背の妹は初  
磨る。兄は米搗く麥搗く。餅つく餅つく望  
月の。里と詠むまでえいとんくサアとん

宿を。礎の坂本や諏訪の湖なほ冴えて。  
鴨や鷗や鶯鶯の番も雁金も。下り居る程は  
おしなべて。フシ皆白鷺と。深山嵐が。さ  
らくく。さつと吹いてはばつと群立ち  
はらふ。翼に。おのがとりく。色品を。分け  
て見せたる雪の空。残んの月は浮めども。  
兎はなつむ。厚水驛路の馬ぞ並走る。走る  
馬にも鞭鎧。武藏も近き秩父山。八王子の  
山賤も。外山の爪木樵りつくし雪を煽らす。  
炭籠や。深谷の宿の。ふかふくと冬籠せし。  
一枝も。春待ち顔に初花の咲きかけんとや  
一二のかけ。熊谷村に盃の佐野の。薑さかな  
にて。強ひ止めんと詠み置きし古歌を。吟  
じて浚けども。スエテ雪の寒さのさのみやは  
フシ佐野の。渡りに着き給ふ。

フシ下司ちかうして猶優し。地最明寺殿籬に  
佇み申しくお上臈。詞越後より下總の檀  
林へ通る所化の僧。今日の大雪先へも跡へ  
も参り難し。寶子の端に只一夜頼みまする  
とありければ。ハア、お易い事ながら。主  
の留守に私が泊めますも如何なり。地脇  
を御頼みなされませ。フシおいとし様やと愛  
敬ある。ムム、ウ主のお留守とは扱は此方  
は御内衆か。いえく。主は私が姉嬢。此の  
頃他國致されて主といふは姉嬢。ヲ、然れ  
ば其方も主同然。地江口の君がかりの宿に  
心とむなと申したは。それは色ある優法師  
炭の折か木の端かといふやうな此の坊主。  
色事の用心ならば。フシ氣遣ひ。あるなと宣  
へば。地娘もにつと打笑ひ尤も色といふも  
のは。眉目容姿とはいひながらどうやら時  
の機會では。鼻缺でも兎唇でも。フシ油断が  
ならぬと走り込む。地天下を裁断く御身に  
も。此の返答はゆきくれてオクリ佇み給ふ  
ぞ殊勝なる。フシ世の中は。なにが常世が留

守住居。妻は手足も土大根蕪惠具菜も摘み  
持ちて。歸る山路の白妙にア降つたる雪か  
な。如何に世にある人のさぞ面白う見給ふ  
らん。夫雪は鵝毛に似て飛んで散亂  
し。地人は鶴鷺を着て立つて徘徊すといへ  
り。されば今降る雪も元見し雪に變らねど  
も。我は鶴鷺を着て立つて徘徊すべき。袂  
も朽ちて袖せばき。フシ細布衣。陸奥の。今  
日の寒さを如何にせん。スエテあり面白から  
ずの雪の日やな。最明寺殿これこそは以前  
の女が姉ならめと。圓なうく主のお方に  
て候か。御覽の如く旅僧の身のお宿の御無  
心申せしかど。主のお留守とありし故待設  
けたる御歸り。地前後を忘する大雪今宵ば  
かりの御恵。頼み入るとぞ仰せける。けに  
く易き御事ながら見苦しき賤が伏屋。何  
とお宿と申すべき。圓いやく旅といひ  
三界の。家を出でたる世捨人草の薙も我が  
爲の。地玉の臺と有難し是非に一夜と宣へ  
ども。あれ御覽せ我々夫婦姉妹さへ。住ひ

かねたる體なれば止め申さんやうもなし。  
是より十八町彼方に。山本の里と申して  
好き泊の候へば。地暮れぬ間に一足も。急  
がせ給へと言ひ捨てて。フシ庵の内へぞ入り  
にける。地あら曲もなやよしなき人を待ち  
つるよ。浮世の人の情なきも。我が誤と顧  
みてオクリ歩みへつかる。ばかりなり。フシ妹  
の玉章。地涙ぐみいたはしや御出家様。最  
前お宿とありしかども姉様の心如何と存じ。  
外に立たせ置きませし。斯く零落しも前世  
の因果せめて出家に値遇せば。常世様の武  
運も開け後世の爲にも悪い事。なされたや  
うにはあるまじ。泊めてさへ進ぜませば別  
に馳走は入るまいと。わしや思ひますと言  
ひければ。圓や、優しや能うぞ氣が付いた。  
地是程の大雪に遠くはよもやと表に出で。  
なうく旅人お宿參らせうなう。餘りの大  
雪に申す事も聞えぬよの。文彌地いたはしの  
有様やな。もと降る雪に道を忘れ。今降る  
雪に行方を失ひ。一つ所に佇みて袖なる雪  
を打拂ひくし給ふ景色。古歌の心に似た  
るぞや。フシ駒とめて。袖打拂ふ蔭もなし。  
佐野のわたりの雪の夕暮。斯様に詠みしは  
大和路や三輪が崎なる佐野のわたり。是は  
東路の佐野の渡の雪の暮に。迷ひ疲れ給は  
んより見苦しく候へど。一夜は泊り給へや  
なう旅の僧スエテ旅のお僧と招かれて。地そ  
れは嬉しき心ざし假の浮世に假の宿。假初  
ながら値遇の縁一樹の蔭の宿も。此の世な  
らぬ契なり。それは雨の木蔭。これは雪の軒  
ふりて。憂寝ながらの草枕。フシ是へとこ  
そは請じけれ。圓いやこれ玉章。折角お宿  
申しても供養致さん物もなし。お淋しから  
うがどうせうぞ。地姉様幸ひ粟の飯さもし  
けれどもお慰みと。櫃取出せばア、そんな  
物なんのいの。折節悪う九獻もなしお菓子  
は無いかと夕霜の。フシ置かぬ棚をや捜すら  
ん。圓これ御兩人旅にしあれば惟の葉に盛  
るとかや。地粟の飯とは日本一の醍醐味。  
御馳走にあづかり度しと宣へば。やれやれ

それはお嬉しやせめては何も綺麗にと。萩の折箸土器も、フシ由ありけなるもてなしなり。地恥かしやお僧様此の粟と申すもの。

古へ我が夫世にありし時は。歌に詠み詩に作りたるをこそ承れ。今は此の粟を以て命

をつぎ候ぞや。文篇けにや蘆生が見し榮華の夢は五十年。其の邯鄲の假枕。一睡の夢の

覺めしも粟飯かしぐ程ぞかし。おはれやけに我々も。打ちも寝て夢にも昔を見るなら

ばステ慰む事もあるべきに。地なう御覽候へ住みうかれたる故郷の。松風さむき夜も

すから寝られねば夢も見ず。なに思ひ出のあるべきと。フシそゝろに。涙を浮べける。

地旅僧もあはれに催され。フシ墨の袂を絞らる。地更け行くまゝに夜寒さ増り冷えわ

たる。何をか焚火にたいてあて参らせんや。思ひ付いたり我が夫世にありし時鉢の木に

好き。數多の木を集め持たれ候ひしを。斯様のさまに衰へ言はれぬ貧の花すきと。皆

人々に参らせて今はやうやう二本残つて。

あのおの雪を持ちたる梅櫻松。わきて夫の秘藏なれども。地今宵の歎待に是を焚火と立

たんとすれば暫く。詞は思ひも寄らぬ事。御志は有難けれども重ねて世に出て

給ひての。御慰み無用になして給はれとよ。文偏いやとて此の身は埋木の。いつの盛り

にいつの花いつの時を待つ可きぞ。只徒らなる鉢の木を。御身の爲に焚くならば是

ぞ採果汲水の。フシ法の薪と思召せ。地し

かくこそあらめ我も身を捨て。人のための鉢の木伐るともよしや惜しからじと。雪打

拂ひて見れば面白や如何にせん。先づ冬木より咲き初むる窓の梅の北面は。雪封じて

寒きにも異木より先づ先立てば。梅を伐りや初むべき。フシ見じといふ人こそ。うけれ

山里の。折りかけ垣の梅をだに。情なしと惜みしに今更新になすべしと。豫て思ひき

や。馬櫻を見れば春ごとに花少し遅ければ。此の木やわぶると地心を盡し育てしに。今

は我のみ忙びて住む家櫻伐りくべて。フシ緋櫻になすぞ悲しき。地扱松はさしもけに

枝を矮め葉をすかして。かゝりあれと植ゑ置きしのかひ今は風吹く。馬松は元より

煙にて。薪となるも理や伐りくべて今ぞ御垣守。衛士の焚く火はお爲なり。フシよく

寄りて。あたり給へや。地等閑ならぬ御親切寒さを忘れ。肌は彌生如月の暖氣にあた

る梅櫻。花見る心地候ぞや。詞扱しも如何なる人の御行末。男主の假名字は何とか申

し候ぞ。自然の時のお爲にも。何か苦しう候べき聞かまほししと仰せける。ア、人が

ましやな古へを名乗るもさすが面伏せ。さり乍ら此の上は何をかさのみ包むべき。地

これこそ佐野の源左衛門常世がなれる果。あはれと御覽候へや扱も過ぎにし仁治二年。

鎌倉は當最明寺殿の御兄君。經時公の御裁斷。夫の常世は將軍の御供して在京の其

の跡の事。常世が父我が爲には舅。佐野の兵衛正常故もなく人知れず。闇打に討たれ

給ひしを聞く等しく我が夫は。取つて返  
し下向の時一族の讒によつて。鎌倉へも入  
れられず道より直に御勘氣とて。所領莊園  
召上げられ常世親子が累代の知行。一所も  
残らず叔父源藤太經景に横領せられ。地生  
きがひもなき此の有様。親の敵も大方は推  
量に紛ひなけれども。實否を糺し討たんな  
め折々他國に身を借し。跡降りかくす雪の  
庵。雪は春にも消え残る夕も知らぬ武夫の。  
身の上憐み給へやとフシさめく。とこそ  
泣き居にる。いかにそれは聞き及びた  
る物語。何とて鎌倉に上り其の御沙汰は候  
はぬぞ。地さればとよ夫婦もさは存すれど  
も。運の盡きとて最明寺殿法華堂の坐禪に  
籠らせ給ひ。萬機をいろはせ給はねば天照  
神の岩戸に籠り。月日の光かくれし如くスエ  
テ理非の判れんやうもなし。調さりながら落  
ちぶれては候へども。取り傳へたる梓弓や  
たけ心は張りつめて。あれ御覽候へ是に武  
具一領長刀一杖。又あれに馬をも一匹繫い

で持つて候。常世つねく申せしは。只今  
にてもあれ鎌倉に御大事ありと聞かば。此  
の具足取つて投懸け鏑たりとも長刀掻い込  
み。瘦せたりともあの馬に懸鞍置いてふは  
と乗り。女ばらに口取らせ一番に馳せ參じ。  
御着到に列つて扱合戦始らば。敵何萬騎あ  
りとても一番に割つて入り。手に立つ軍兵  
寄り合ひ打ち合ひ。分捕高名譽をあらはし。  
一方を攻破り。君の御馬の眞先かけ。思ふ  
敵の大將と。むんずと組んで刺違へ死なん  
す身の。地エ、口惜しや此の儘ならば徒ら  
に。飢寒に迫り死なん命。なんほう無念の  
事さふぞと。姉妹かつばと伏し沈みフシ泣  
きくどく。こそ道理なれ。地旅僧も至極の  
理にフシ衣の。袖をぞ絞らるる。地よしや浮  
世の浮き沈み斯くては果てじ只頼め。我世  
の中にあらん限りはの誓を願ひ給へやと。  
言葉を残し残る夜も明方近く陳白く。雪も  
小止めばさらばとて暇申すと出で給ふ。姉  
妹假の宿ながら是も御縁と思召し。春お下

りの折柄は立寄り夫にも逢ひ給へ。命あら  
ば我々もとさらばくの御名残。自然鎌倉  
にお上りあらばお尋ねあれかひくしくは  
なけれども公方の縁になり申さん。御沙汰  
捨てさせ給ふなと。言ひ捨てて出舟の共に。  
名残や三三へ惜むらん。フシ既に今年も臘  
月下旬最明寺殿の御臺所。松の御寮の仰と  
して俄に稀有の御觸あり。晝夜の早打暇も  
なくフシ近國残らず觸れにけり。調なう忙  
がしやく。只今我等當國へ下る事餘の儀  
にあらず。扱も最明寺殿天下の政道を考へ  
なされんため。坐禪觀法の方丈に閉籠り近  
習外様の侍は申すに及ばず。御臺若君へも  
御對面なく禁足なされ御座候。此の隙間を  
幸ひとや思はれけん。御舍弟式部の冠者佐  
野の源藤太を語らひ。謀叛を起し遂に其の  
身も滅び源藤太は落失せやうく事治つて  
候。斯様の騒ぎの出來するも最明寺殿館に  
御座なき故。國に執權なきは人に魂なく  
家に柱なく鑑鉢に汁なく體に酢の無きが如



しとあつて。忝くも御臺所坐禪をお出でな  
さるゝ迄は最明寺殿御名代との御事にて。  
女中の御身に執権職の装束を召され。御側  
には諸大名の奥方いづれも男の出立にて。

非番當番の際もなく政道取り行ひ給ふ事。

古への尼將軍に相も變らず候。さは申しな  
がら人の口には戸が立てられず。牝雞が時  
をつくるか鎌倉殿はととか、ぢやなどと嘲  
つて。すは大事といふ時に勢が付くか付か  
ぬか物は試しに集めて見よと。坂東八ヶ國  
の諸侍悉く物具して急ぎ鎌倉へ御參あれ。  
仰付けらるゝ事ありと觸れさせ候が。餘り  
に諸軍勢遅く候程に。何とて遅なるはぞ催  
促致せとの御使を。承つて候程に急がばや  
と存じ候。やあく何と申すぞそれへ御參  
りあるは武藏相模の御人數と申すか。先づ  
は早きこと急いで御參り候へ。あれへ見え  
たるは上總下總の御人數ぢや。やれく壯  
麗なる出立かな。遅いとの御事お急ぎ候へ。  
いや。是へ見えたるが常陸の國の御人數か。

道理で眞先な武者が。黃楊の棒を提けたは  
常陸坊といふ心か。一段と華やかな出立何

れをいづれと申されぬ。此の國々へは最早  
參るに及ばぬ。足を助かつたヤア。未だ上

野下野の御人數がお見えない。先づ上野へ  
參らう。何といふ是へ御出であるが上野の  
御人數ぢや。やれく嬉しや參るに及ばぬ。

今迄の出立に劣らぬ夥しい事かな。只一刻  
も御急ぎ候へ。最早悉く御參り候我等は先  
へ罷り歸り。各鎌倉へ御着きある由申し上  
けうと存する。皆々聞かれ候へ關東八州の  
諸軍勢。是迄御着き候ぞ其の分心得候へ候  
へと。地ふれて通りし勢はゆゝしくもま  
た三五ははなぐし。

### 女勢揃へ

衣紋かき繕ひ美精好の長絹。黃金造の御佩  
刀式目所の上段に。悠々と坐し給へば左右  
は白齒の御侍女。島田ほどいて若衆監廊下  
づたひの長袴。花を並べし如くにて御太刀  
の役調度掛。作法正しき廣廂諸大名の御前  
がた。いづれも男の出立にて。めんく殿  
御の役々のオクリ座なみへ亂さず伺候ある。  
第一の座上には都六波羅陸奥守。繁時の北  
の方お連の前。連理の若松若竹に比翼の風  
凰唐草の。刺繡したる薄直垂蒔黃裾濃の袴  
腰。横幅ひろく結ばれしは此の月帶の御祝  
儀と。言の葉もじさつゝましき。フシ袖かき  
合せ着座ある。次は秋田の城之介義景の御  
簾中。おりう御前は成人のオクリ子の親。な  
れど何某の中將殿の季娘。烏帽子なれたる  
肩疊に戀を。染め込む狩衣の。つゆ長々と  
フシ結び下け。裏紫の。藤袴。男じみたる摺  
足も。フシ爪先そつてぞ見えにける。是も  
同じ風折に蒔繪の飾太刀佩いたるは。足利  
左馬頭の御内室お吉の君。此の春嫁入つて

人中を信夫文字摺信夫布。折目正しく着なせし素袍袴ののりだちも、やはくんとせし挨拶の。いづれも是はお早うと。物靜かにぞ伺候ある。次は佐々木隠岐の入道の息女お百の姫。目結の直垂五色の絲にて菊綴し。嫁入ざかりの花づくし袖の重ねに匂はせて、フシ大人くろしき。懸烏帽子。行儀正しき。割膝に袴の襠の高ければ。さぞ紅の下紐の、フシ裾や分れん心憎さよ。同じく續いて四條藏人の奥左近のお方。金紋紗の狩衣薄色の指貫。白銀造の太刀横たへ寺社奉行の座にぞ着かれける。大目付は宿谷の左衛門が女房おつけの前。是も二人の子持筋に鶴龜染めたる素袍袴。打刀さしほらし四邊近所を見廻して目を働かず顔に、フシお役はさぞと知られける。是は名越金吾の後家熊千代が母。おきといふは年配も磯部の善知鳥安方の。子を後見て身を捨てず髪は切つてもなんのその。我が子の末も君が代も萬歳烏帽子引き込で。御披露所に着

座ある顔もつやくほやくと。老いて再び若後家や。昔の蝶の吸ひ残す、フシ花の露うくばかりなり。次は山名の。總領娘おらくは今年十八歳。土岐の二郎が妹おふりといふも脇話の。年は行かねど恰好の大夫太夫のお内儀おさち御前。思ひくしの太刀狩衣。大納戸小納戸進物所御膳番。フシ役所役所にコハリ着座ある。扱其の外お臺所の彌惣が女房。ゐろりの間の加藤が女房おはひおこん。料理人の三太が女房おなべの前。油奉行蠟燭奉行酒奉行の。彌吉兵衛が女房お樽の前おかんの前。茶道坊主の珍齋が妻おちやくの前に至る迄其のしなくの男出立。直垂狩衣布衣素袍。長袴切袴平禮白丁退紅丁袖をつらねし装は。地女譚の島とも謂つべし、フシ賑ははしとも熱かなり。地中にも佐々木入道が息女今日の着到承り。中門の扉押し開けば東八ヶ國の諸軍勢。召に従ひ參上ある。當國には伊藤の一黨長野清原會我山越。河津大場竹の下櫻井岩永土肥岡崎。御崎三浦佐原田原小笠原。コハリ小山平山宇都宮手勢々々を引率し。旗標馬標兜の星を輝かし。中門の廣庭より大名小路の極樂橋。錐を立つべき畷地もなく。人馬充ち満ち並び居たり晴れがましくぞ。三重見えにける。地佐野の源左衛門常世は今度の出陣望む所と。ちぎれ具足に鍔刀瘦馬に繩手綱。女房は長刀擔け馬の口に引つ添うて。物その數にあらざる氣色さぞ笑ふらん笑はば笑へ。所存は誰にか劣るべきと心ばかりは急けども。弱きに弱き柳の絲のよれによれたる瘦馬なれば。打てどもあふれども先へは進まぬ足弱車の。御所の此方に駒を控へて見渡せば。東八ヶ國より集つたる數萬の軍兵是を見て。如何なる者ぞ見苦しや。あの態で此の中へ出面は何事と。地一度にどつと笑ふ聲聞をつくるが如くなり。地此の音奥に聞えしかば御臺所御悦喜あり。自ら女の身にて此の度の勢揃へ。斯様に従ひ集まる事これ皆殿の御威光目出度き故。若し

も重ねていかなる大事ありとて。まづ此の如く馳來らば即時に敵を追散らし。鎌倉は千代萬代心安や目出度やな。いで軍兵に一禮して歸さばやと宣ふ所に。裏の門より最明寺殿旅に奪れし御有様。御臺是はと驚き給ひ扱は坐禪を御出でかや。目出度き上の目出度さよと悦び給へば。若君も立出でて、フシ御對面こそ賑しけれ。調我此の度坐禪禁足と偽り。誠は廻國行脚して民の安危を窺ひし。其の隙間を見て冠者めが悪逆。天の譴目前たり。又天女丸が武功末頼もしく。北の方の勢づかひ。彼此以て人道が妻子ぞやと御悦は限りなし。扱此の諸軍勢の中に。横縫の斷れたる腹巻して鑄長刀を持ち。瘦せたる馬に女房の口取つたる武者一騎あるべし。地夫婦共に召連れ來れと御詭あれば。佐々木が息女承りオクリやがて、御門に立出づる。地大勢とはいひながら花紅葉と出立つ中。見紛ふべくもあらばこそつかくくと立寄つて。調これく上意なるぞ。

男女ともに御前へ罷り出でられよ。常世驚き何と某夫婦御前へ召さるゝとや。あら思ひ寄らずや人違へにても候か。今一度御伺ひあるべうもやとありければ。いやく如何にも見苦しき出立の武者一騎。女房に瘦馬牽かせたる者あるべし。召連れ參れとの御詔の上は左様の者は外になし。はやく參られ候べし。地何が扱此の上は。違背申さん様はなしけにく女房。某が敵又龜突申し上げ。召出されて頭を刎ねられん爲と覺えたり。如何あらんと言ひければ、よし、それも力なし。地假令夫婦が御前にて生首を討たるゝとも。一度鎌倉殿拜し奉る悦び。一念は潔く親の敵讎人を。三日が内に取殺し此の世の妄執晴らすべし。いざさせ給へと打笑ひ大床指して見渡せば。調今度の早打に上り集る兵。綺羅星の如く並み居たり。地扱御前には諸侍其外數人並み居つつ。目を引き指を指し笑ひ合へる其の中に。横縫の斷れたる古腹巻に鑄長刀。女

房に擔ひさせ惡びれたる氣色もなく。參りて御前に畏る。調やあゝあれなるは佐野の源左衛門常世な。いかに女房。是こそいつぞやの大雲に。宿借りし修行者よ見忘れであるか。其の夜の情忘れ難く召出してありつるわと。地宣へば夫婦の者長刀からりと投捨て。あつとばかりに頭を下け、フシ感涙袖をぞひたしける。地重ねて仰出さるゝは。調汝が叔父源藤太經景。父政常を討つて剩へ。累世の知行を横領したる罪科紛れなく。我安房の國を巡りし時彼の者落人となつて隠れしを。房州の探題に申し付け成敗を遂げさせたりと。地御言葉の下より獄舎の雑色首桶持つて。常世が前に差置いたり常世あまりの有難さ。蓋を取れば源藤太が首なりけり。こは忝き御高恩。冥途の父が悦び。現世の我等が本望いつの世に何をもつて。此の御恩を報ぜんと手を合せ涙を流し。大床に額をつけ、フシ仰ぎ居るこそ道理なれ。地なほく仰せ出さるゝ旨あ

り近う参れと御膝近く召され。舞いで汝佐野にて女房が申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるとならば。断れたりとも其の具足取つて投げかけ。鑄びたりとも其の長刀を持ち。瘦せたりともあの馬に乗り。

一番に馳せ参るべき由申しつる。言葉の末を違へずして参りたるこそ神妙なれ。地先づ

先づ沙汰の始めには常世が本領佐野の庄。

三十餘郷返し與ふる所なり。又何よりも

切なりしは大雪降つて寒かりしを。女房が

情に秘藏せし鉢の木を伐り。火に焚きてあ

てたりし志をばいつの世にかは忘るべき。

さらば女房に引出物せん。舞いで其の時の

鉢の木は梅櫻松にてありしよな。其の返報

に加賀に梅田越中に櫻井。上野に松枝合

て三箇の莊。子々孫々に至る迄相違あらざ

る自筆の狀。安堵に取添へ賜ひければ。

常世は是を賜りて。三度頂戴仕りこれ見給

へや人々よ。始め笑ひし輩もこれ程の御氣

色。さぞ羨しかるらんさて國々の諸軍勢。

皆御暇賜り故郷へとぞ歸りける。其の中

に常世は。その中に女房は。悦びの眉を

開きつゝ。今こそ勇め此の馬に打乗りて。

上野や佐野の舟橋とりはなれし本領に安堵

して。歸るぞ嬉しかりける。

右之本令吟覽頌句音節墨譜  
等不殘毫厘令加筆候可有開  
版者也

竹本筑後掾

竹本  
新印

教博

重而予以著述之本令校合候  
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目

山本九右衛門版